様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 26 日現在

機関番号：13201
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010　～　2012
課題番号：22520134
研究課題名（和文）　自然の歴史化-環境芸術における narrative なもの-

研究課題名（英文）　Historization of Nature - Narrative of Environmental Art -

研究代表者
伊東　多佳子　（ITOH TAKAKO）
富山大学・芸術文化学部・准教授
研究者番号：00300111

研究成果の概要（和文）：
環境芸術は自然環境を主題にして成立してきた。しかしそこで扱われるのは、西洋哲学の伝統的な自然観ではもはや捉えきれない複雑な現代の自然環境である。未曾有の速度と規模で現在も進行している環境の悪化が示すことは、自然がもはや調和と秩序の中で循環する存在ではなく、死すべき運命の中に歴史を持つ人間と同じように、不可逆的な時間のうちに歴史を有する存在だということである。本研究は、英国の環境芸術の中に表現された現代の自然環境の考察を通じて、自然の歴史化と環境芸術におけるnarrativeなものを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
Environmental art addresses the natural environment. Yet environmental art deals with the contemporary complex natural environment that can no longer be grasped from the traditional point of view of Western philosophy about nature. The degeneration of environment which is hastening and progressing at an unprecedented speed and scale suggests that nature might, therefore, be understood not as an eternal circle in harmony, but as a mortal existence with history in irreversible time, like human beings. Here, I examined the state of contemporary natural environment expressed in the British environmental art to clarify about the historization of nature and the narrative of the environmental art.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：環境美学・環境芸術・美学・芸術学

１．研究開始当初の背景

(1) 環境芸術および環境美学の研究動向と本

研究の位置づけ

環境芸術に関する研究書は、1960 年代後半の誕生から現在までの 40 年間の歴史を概観するものが近年続けて出版されている。しかし、それらのほとんどが個々の作品の解説とその分類に主眼を置いており、美術史の文脈の中で、環境芸術を現代芸術の中の一運動として捉えて論じている。

一方、環境美学に関しては、英米では「参与の美学」(アーノルド・バーリアント)、「科学によって正しいと認められる自然を扱う美学」(アレン・カールソン)、ドイツでは「雰囲気の美学」(ゲルノート・ベーメ)、「日常性の美学」(ヴォルフガング・ヴェルシュ)の研究があるが、既存の自然美学の図式を排除し、主観性を極端に嫌うために美学の方法を逸脱し、「環境」という言葉が本来含む多義性から対象を日常のあらゆるものに広げることにより、具体的な美的体験を無効にしてしまう傾向がある。国内では自然の美的経験を文化概念としての「自然−世界」(西村清和)という概念領域から論じる試みがある。

本研究は、まず環境芸術を、美術史の文脈ではなく、美学的に分析することで、同時に環境美学のなかで排除されてきた主観性を否定することなく、「自然の美的経験」を、芸術の形式の中で検討することによって、芸術経験とパラレルな自然(美)の経験の新しいモデルとなる環境美学を提示することを目指す。

(2) これまでの研究成果と研究の着想について

これまでわたしは、人間と自然のあらたな関係を模索するために、環境芸術を手がかりにした環境美学を構築することに一貫して取り組んできた。というのも、環境芸術は現代芸術の中でも人間と自然の関係をもっとも直接的に反映している芸術であり、現代の自然環境に対する反応が明確に表現されているからである。また、その背景にあるロマン主義的な性格を抽出し指摘してきたが、それは人間の自然からの乖離を強く意識し、現代社会の危機的状況をすでに予言していたと考えられるロマン主義に認められる「有機体的自然観」が、地球を一つの生態系として捉える現代の自然観と酷似していると考えたからである。

本研究の先行研究となる平成 15−17 年度科学研究費補助金基盤研究(C)「自然・風景・環境—環境芸術をてがかりにした環境美学の構築」において、環境芸術の考察の中で、最新の環境芸術が主題にする自然が、古代ギリシア以来の伝統的な「循環する永遠の自然」ではなく「歴史性を持つ自然」であることを指摘した。近年の環境芸術の試みの中には、「自然」対「人間」ないし「自然」対「人工」という単純な二項対立を超えて、科学技術を用いて生態系を健全な状態に戻そうとするものが多い。そこに表現される自然はロマン主義的な自然観ではもはや捉えきれないまさに現代の自然である。

本研究はこれら先行研究の延長線上に、現代の自然環境を「歴史的な時間性を持つ、死へと向かう存在としての自然」と捉えることに力点を置いて、あらたな「自然環境の美学」を展開しようとするものである。

２．研究の目的

本研究では、英米の環境芸術について美学的に分析し記述し、とくにそれらが扱う風景の物語性と自然環境の歴史性を明らかにすることで、環境芸術の論理基盤となる、現代の自然環境を捉えるための新しい環境美学を構築することを目的としている。古代ギリシア以来の伝統的な哲学の文脈で捉えられてきた「循環し永遠の生命を持つ自然」ではなく、自然環境の急激な悪化に伴い、「死すべき存在」として捉えられなければならない自然の現在を、環境芸術を手がかりに美学的に考察する。

まず、環境芸術全体を概観するために、1960 年代後半の誕生から現在までの 40 年間の歴史をたどり、現地調査を行うことで、個々の作品に認められる自然観の変遷を詳細に分析し記述する。初期の作品の現在までの歴史をたどることと同時に、とりわけ英米の現代の作品に表現され、文字通り作品を取り巻いている現代の自然環境の性格を、そこに語られる物語と歴史性をもつ自然という点から解明する。

これと併行して行う自然観をめぐる理論研究に関しては、ロマン主義ならびにそれに強い影響を与えた古代・中世の自然観、神学観などの文献学的研究を生かして、現代にも強く残るロマン主義的な自然観の影響や実情を明らかにする。

同時に現代の「歴史性を持つ自然」としての自然環境について、環境倫理学や環境哲学による環境をめぐる議論とともに、保全生態学などの自然環境に実際的に関わる分野の現状についてもあわせて考察する。これにより現実的で具体的かつ説得力のある環境美学を構築することを目指している。

くわえて現在さまざまに行われている環境美学の試みの検討・分析も併せて行う。最終的には美学が本来備えている主観的な側面を切り捨てることなく、自然を守りたいという、普遍的で根源的な感覚や感情を助け支えうるものとして環境美学を提示し、現代の環境芸術を支える論理的な基盤とすることが目標である。

３．研究の方法

本研究は、3年計画で、すでに研究の目的においても述べたように、英米の環境芸術について美学的に分析し記述し、とくにその中に表現された「風景の物語性」と「自然環境の歴史性」を明らかにすることで、環境芸術の論理的基盤となる新しい環境美学を目指すものである。そのため、全体の研究計画は、（1）英米の環境芸術に関わる個別の実証研究と（2）環境美学の理論的研究という二本の柱にそって実施される。（1）については環境芸術関連の文献資料および映像資料の収集・精読と同時に、英米各地にある環境芸術作品の実地野外調査を行う。（2）については、ロマン主義の自然哲学ないし関連する美学・芸術学、環境倫理学、環境哲学、保全生態学、および欧米の環境美学の研究が中心となるために、おもに文献資料の収集とその精読が必要になる。

3年間を通じて、自然環境との関わりを最重要課題としている英国各地にある最新の環境芸術作品の実地野外調査を行う。調査に資料によって把握し、野外調査を行った。

英国の環境芸術作品は、木、石、土、植物などの自然物を用い、自然の中で制作したものが多い。それらの作品は自然環境の中に配置されているため、その設置場所は林野庁の管理する森林公園が多く、英国各地に点在している。スコットランドないし北部イングランド、南西イングランド、北ウエイルズ地方の三カ所にわたるそれらの森林公園は一般開放される期間が限られているため、すべての施設が開放される夏期に集中して調査を行う。また各地に点在し、公共機関から離れた場所に位置する調査箇所を効率よく経済的に回るためにレンタカーを利用し、作品の映像資料はデジタル・カメラによって記録収集する。この映像資料の記録およびデータ収集のために必要とされる分析処理能力の高い、移動に耐えるラップトップ型コンピュータおよびデジタル・カメラ、大量のデータの記録と保存を可能にする記録メディアを購入するための費用を計上した。

初年度の平成22年度は、デイヴィッド・ナッシュ《トネリコのドーム》プロジェクト（北ウエイルズ、グイネズ州）、　同《木製の丸石》プロジェクト（同）、アンディ・ゴールズワージー《シープフォールズ》プロジェクト（スコットランド、ダンフリーズシャー州、イングランド、カンブリア州、同、ヨークシャー州、全46点）を中心に実地野外調査を行った。

二年度にあたる平成23年度は、とくにヨークシャー・スカルプチャー・パーク（イングランド、ヨークシャー州）を中心に、前年度に引き続き、デイヴィッド・ナッシュ《トネリコのドーム》プロジェクト（北ウエイルズ、グイネズ州）、　同《木製の丸石》プロジェクト（同）の実地野外調査を行った。

最終年度にあたる平成24年度には、研究の総まとめとして、最新の英国の環境芸術作品と生長しつねに変化している環境芸術作品の現在を調査した。これはとくに、二年の研究の途中経過としてまとめた論文を実証的に検証し確認するためにも必要な作業であると考えられる。自然環境の歴史性によって特徴付けられる環境芸術作品の多くは植物の生長に支えられるものであるため、その変化の記録と分析のために本来継続的な調査が必要である。こうしたことをふまえて、デイヴィッド・ナッシュ《トネリコのドーム》プロジェクト（北ウエイルズ、グイネズ州）、同《木製の丸石》プロジェクト（同）と王立植物園（ロンドン近郊）の実地野外調査を行った。

これらの環境芸術作品の野外実地調査によって収集された資料をもとに、自然環境との関わりに重点を置いた環境芸術の個別の実証研究を行う。それには、最新の環境芸術と環境美学の研究・精査のための文献資料の収集と精読は欠かせない。併せてこれを理論的に支える環境美学の構築のために、最新の環境美学、環境倫理学、環境哲学および保全生態学の文献の精読と共に、ロマン主義とその周辺の自然観と、現代の自然観の考察を深める作業を行う。これにより、現代の自然環境から乖離することのない、普遍的でかつ具体性を失わない環境美学の哲学・方法のための基礎が築かれる。本研究の成果は、美学会および哲学に関わる学会などで発表された。

４．研究成果

（1）研究の主な成果

本研究では、自然環境をめぐるあらたな美学の構築を、とくに英国の環境芸術を手がかりに行った。自然を論じる上での困難は、当の自然が指すものが何なのかということがきわめて曖昧なことから生じている。たとえば、自然と人間というとき、すでにある一定の距離をとって対象として眺められる自然が前提になっている。これは風景を語るときにより顕著になる。ひとはそれを「美的に切り取られた自然の断片」として見ているのである。しかしそのとき切り取られる「自然」とは一体何なのか。環境芸術は自然環境を主題にして、自然自体に素材を求めることで成立してきた。そのため、環境芸術は従来の哲学の中で前提されてきた自然と人工、自然と芸術の対比を複雑でさらに曖昧なものにしてしまう。自然倫理学の議論のなかで、アンゲーリカ・クレプスが試みる「自然」の定義は「人間によって作られたのではなく、自らの力で生成消滅し、あるいは変化し恒常性を保つような、わたしたちの世界の部分」であるが、「自然」の反対概念をこの意味におい

て、「人工物」とすると、もはや自然対人工の図式は単純なものではなく、純粋な自然も純粋な人工物も存在せず、あるのは、対極にある「純粋な自然」と「純粋な人工物」の間に、境界線の曖昧な「自然」と「人工物」があり、濃度の異なる人工的な自然（人の手が加えられた自然）ないし自然から作られた人工物がわたしたちの世界を取り巻いていることがわかる。

それにもかかわらず、環境倫理学や環境美学の議論において、ひとはやすやすと「自然」概念の下に、カントのいう「超越的自然概念」や人間のいない自然を想定してしまう。このことは、人間中心主義の否定ということにも容易につながりうる。しかし、現実に「自然」自体というものが存在しないように、わたしたち人間が、人間の視点以外のものを中心にして自然を考察することは不可能である。きわめて頻繁に行われ、一見すると正当な議論のように見える人間中心主義への批判と自然中心主義の主張は、自然を道具的価値と見なす考え方と人間中心主義を短絡的に同一視することからくる混乱した議論から導かれた誤った帰結である。自然に関して、わたしたちが人間である以上は、わたしたちは人間を中心として思考するしかない。自然の美的経験について考察する美学は、その成り立ちからいってもわたしたちにとっての自然を認識する以外の方法は持たない。

そしてまたおそらくこの地球上の自然にはすべて人の手が加わっていて、事実として、自然は、すでに死へと向かう一回限りの不可逆的な時間のうちに歴史を持つ存在へと変化していると考えるのが妥当であろう。それにもかかわらず、今も根強い調和と秩序のある自然、循環し、永遠の時間性を持つ自然という見方は、ともすれば「自然のバランスの崩れはひとえにヒトの干渉によるものである。人為から免れるようにさえしておけば、自然は良好な状態に復帰する」（鷲谷いずみ『生態系を蘇らせる』2001 年、日本放送出版協会、74 頁）という見解を導く。ひたすら人為を排することだけが「自然のために」なすべきことだという極端な自然中心主義は、自然か人間かという単純な対立と二者択一の図式によるものである。

英国の環境芸術、とりわけ、デイヴィッド・ナッシュの《トネリコのドーム》、《木製の丸石》およびアンディ・ゴールズワージーの《シープフォールズ》プロジェクトにおいて明らかにされるのは、それらの作品において表現されている自然環境が、自然と文化とそれぞれの歴史が複雑に絡み合ったものであり、歴史性を持っているということと、現代芸術における二つの特徴である「特定の場所につくること(site-specific)」と「物語性（narrative)」という性質をはっきりと示しているということである。これらの環境芸術作品は、意図的に自然と人工の中間にあることで、わたしたちの自然との関係が、単純な二項対立ではない、きわめて複雑な環境の網の目の中にあることに気づかせてくれる。わたしたちは、自然環境がいまや数え切れないほど多くの自然物や人工物によって構成される不可逆的な歴史を持つ存在であることを知っている。そして、環境芸術作品は、そのように歴史化された自然環境をはっきりと示すものである。

以上のような結論を導いたことが、本研究の主な成果である。

（２）得られた成果の国内外における位置づけおよび今後の展望

（１）において記述された成果、すなわち現代の自然環境の歴史化および環境芸術の物語性について、国内外で指摘した研究はこれまでにはない。また、環境美学の枠内にとどまることなく、環境倫理学、なかでも自然倫理学および保存生態系における「自然」概念と連動しながら、芸術に表現された自然環境を美学的に考察する研究も従来にはなかったものであり、そうした点においてきわめて画期的な研究といえる。

今後は、さらに本研究によって明らかになった「自然」対「人工」および「自然」対「芸術」という二元論的な考え方の誤謬について反省をくわえ、両者の中間的存在である環境芸術の本質と現代の自然環境の孕む問題を明らかにしていきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① Itoh Takako　Historization of Nature - Narrative of British Environmental Art、Journal of International Philosophy、査読有、No.2、2013、313-325、なし

② 伊東多佳子　自然の歴史化―英国の環境芸術におけるnarrativeなもの―、国際哲学研究、査読有、第２号、2013、113-125、http://www.toyo.ac.jp/uploaded/attachment/8175.pdf

③ 伊東多佳子　自然の歴史化と環境芸術の物語性（２）―デイヴィッド・ナッシュ《トネリコのドーム》をめぐる考察―、GEIBUN007 富山大学芸術文化学部紀要第７巻、査読有、第７巻、2013、94-105、http://artabe.com/outline/13pdf/geibun7_094_105.pdf

④ 伊東多佳子　自然の歴史化と環境芸術の物語性（１）―　デイヴィッド・ナッシュ《木製の丸石》をめぐる考察―、

GEIBUN005 富山大学芸術文化学部紀要 第５巻、査読有、第５巻、2011、106-112、http://www.tad.u-toyama.ac.jp/outline/1pdf/geibun5_106_112.pdf

〔学会発表〕（計２件）うち招待講演計１件

① 伊東多佳子　自然の歴史化―デイヴィッド・ナッシュの《トネリコのドーム》と《木製の丸石》をめぐる考察―、美学会西部会、2012 年 12 月 1 日、於：東京藝術大学

② 伊東多佳子　自然の歴史化―環境芸術におけるnarrativeなもの―、東洋大学国際哲学研究センター、2012 年３月 16 日、於：東洋大学（招待講演）

６．研究組織

(1)研究代表者

伊東　多佳子（ITOH TAKAKO）

富山大学・芸術文化学部・准教授

研究者番号：00300111

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし